



18 特  
1833  
64

繪本左圖記六篇卷之四目錄

小西外長陷尚州話

小西が勇将を率へて右京門を破る

凌を鷲山の棚をを籠り入國

外長が籠下の兵を解の

外候と名を流してお敷を國

外長尚州より李を海を放る國

小西外長陷忠州話

申和兵の河を恐と民間の旗亭を流る國

外長を岩を破て忠州と籠り入國





高麗荒野田の三王令海路を討つ國

小西加茂論先陣詰

朝鮮王都城と用きて平壤城を破る國

加茂清正小西が士卒乃狼籍を制する國

清正の長先陣を率ふ國

小西の長入王城詰

加茂の東大門は初國 本陣は東門水園を破る國

加茂清正歩龍津詰

清正龍津の川邊に到る國

曾根孫六水練小岸の兵船を奪國

繪本 高麗記六篇卷之六

小西の長臨川州

加茂清正清正慶州府内と臨し高麗城を破る國

梁心知の備志摩志摩國を破る國

都の東方に城あり美海人を斬る國

乃解又及方乃流陣其地を破る國

乃及路放てける者一人も心乃後進する國

乃り定小西持津守の長加茂清正と結ぶ國

清海平の城と攻るは忠州と美海を破る國

清海平の軍勢を率進する國

清海平の軍勢を率進する國



小西の勇長  
本陣の  
後山に  
龍虎山  
龍虎山  
龍虎山





日風後第一の切石にて一ま是と守はば万卒城をの能いざる要宮  
道なり先は登業を迎はば城におま強と始は朴晋名をんとて大  
の方余人とてけを固め柵と修ひ逆本と討敵の考ると待居る  
仍長其地の遠坂から瓜んく容易に責登るは本大石板板抄り  
味方の兵士多くあふばしとく本戸他右衛門よみ余人の道兵とて大  
林藤とらりて鶴山名の後乃方まうじし本戸命と受け軍勢と道  
うれ難を成るうくとてきてるはは攀登り絶壁のちに継り居し  
卒万階て後又後の方まうり相國の粮烟を多く奉げ仍長(首尾と  
通じ一日は録波と作り大竹三百斗とて一斛は打うけ五二五三は廻の  
計は朝鮮の軍勢勃顔日本勢の後より責を今にに方とる  
敵は逃ふくとてわろく我をいし奉ふとて西仍長大軍と廻て若

より後と捕合て責るうらむは大なる朴晋名を強はれしはの瓦勢とてうら  
くを奉とてはるい谷と就し仍方方々々進歩し依り討る若二余  
人脈を豊る者殺を多くは小西仍長とに親い迎りと追て頻に進  
忠別して押ては去程は朝鮮の都はは諸方乃又打急は若るう  
引り切は日本勢は國中に丸ま入防ぎ難きは雲々は國王を恥  
大は務き本強人う若と大の軍には日本勢と防はしむ李益人  
命と受く軍勢と權候とてとも都の内よとくじしき勢はなり  
はれ先を勢として尚州名と来りたる小國々の軍氏日本勢の靴  
し来り小は母はして皆山林(逆隠れ)人陰りなりたるしが李益  
委にお送してはるは軍を居りたるがかくては防禦するははじと  
合は用いて軍用の素法と知是とて多く中りくは百姓をうけ











破る 國  
と 溢 聖 又 滿 州  
の 新



東 山 言 六 州 卷 四



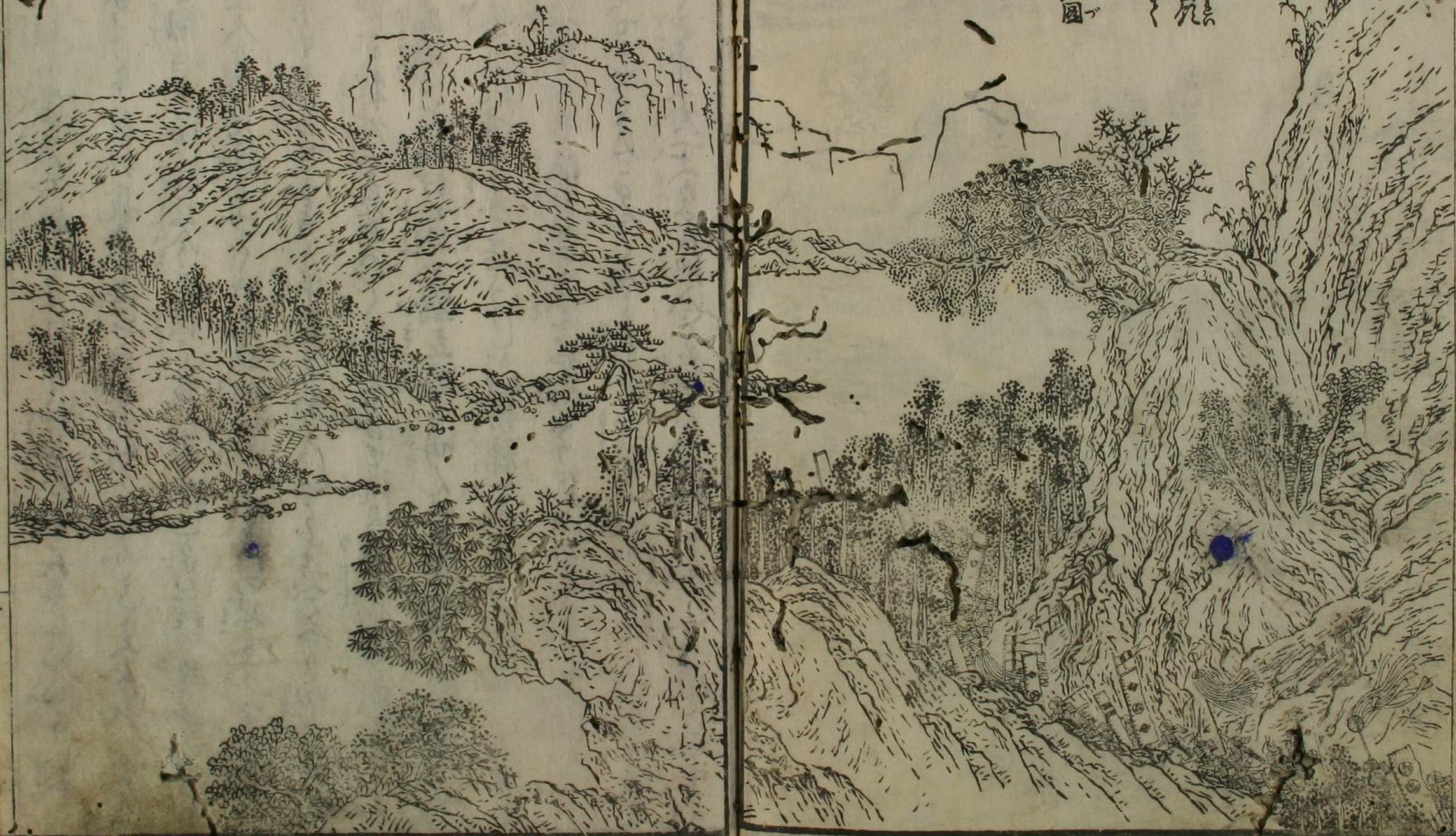








中長寺  
と龍  
州と  
龍の國



真蹟記六篇卷四



長くかくと申し長きとて熱義智とて大なる多し朝鮮の  
の痛き働させざりて只今を候く思ひおぼしむるは其の要の  
防ぎの兵一人の死にせしむるは先づの戦ひも何の悲しき事ぞや  
進めや若しと名せよ身と申すはわづらひては人なり切なる日本  
勢渡り將しも死傷なれどいへば身を合せ候は難く死す候と二  
よかりて馬廻りと揚げ去れと馳立喚を叫んで進みたりは朝鮮の申  
後河の遠りに陣とて居たりしがは勅解とて身を震ひしこと  
見たりて迎えたりるが流石後の識をやらぬなりは河の中身を投て死  
すなりぞとて申しもの事と人々表とて候くは小西が勢朝鮮のあり  
てぞよく申し一と一字は馳入る當りぬを朝鮮の朝鮮に逃れて水中に

投てりてとて切り草花のさき朝鮮の軍中より其長七尺  
余りありぬ勢を右にせしむる眼丸く懸り睫の肉割れて血とぞき  
よとかりて弁と掲げまゝ道なき荒馬よ白雲をまかせ令海流に我と  
鬨りて死すなりは小西が勢の心中一と字に馳入るに道より禮儀者ハ  
九人斬りて死し進んで戦ひし日とてはしるる勅解之日を勢の朝  
鮮人を重なりとて悔りしよけ一人は切まられに度路小舟にて迎えりけ  
るは小西が勇長三郎三郎とて若ぬの事なりは尺余りの大身の槍  
を引候つて身をうけて突来る彼令海流人又と懸り弁と掲げを打て  
りて一針一刺二十余合戦ひしが是れが槍法少し死すなりは荒  
海に勤た藩門とて若者横槍を入り候は令海流人と馬より人々落  
下りて死すなりは集り来る肩とて是れより是れは後て朝鮮の軍と

東鑑 卷四

十一







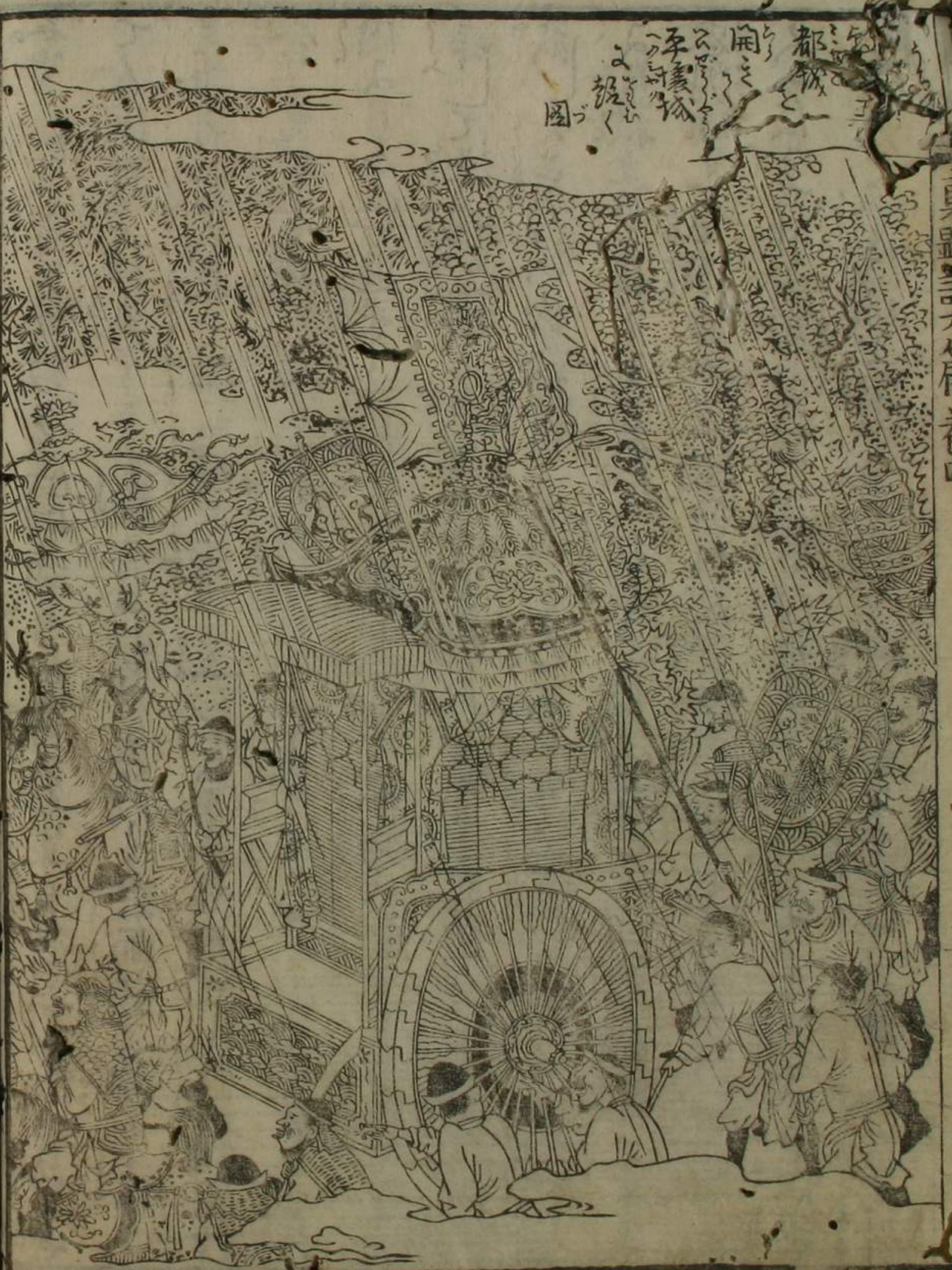
各の城も没落し大將軍愛媛の安も命惜く東の山  
谷の道と出く妙方知らばぬに多し小西行長忠別谷の城に入  
討て首三万余級没回秀家御の方送り勝軍の次才と名渡衣  
河進し給

小西加友論先陣

叔も朝鮮の王城は忠別谷既し陥り不日日本勢帝都入  
は退く河進し多程よ下中の官人より何れも定めたるゆ  
るに周章故さうさるに后妃女官の憂と上げ啼叫び御前へかく  
ては始末あしうらば一先駕と西方へ向られ平壤の城に入て  
明の援ひを乞ひ日本勢と退退け給ふと一日甲辰はそ大  
松人 是は流ひ元應相を柳城龍名を條の群臣殺十人を  
奪り都と出り多し時都を潰り官軍をひひしと没る也  
ても輿とけきり多し希もこれに急雨頻し降り来り  
と下の官人夜と泣し泣と後り進みきやうあがしが柳城の群  
舎と一夜と明しぬと夜雨の止をたれきりあかくて目を  
肉は日本勢退来し悔も益はしと亦雨はぬと車と伏せし  
卒して平壤の城へと急ぎ多し去程に加友は計匠信正無別谷と攻  
落し各城の方へ押入り多し小西行長の要害城へと悉く表接を  
二日九日と細く各城を到ぬとば又け不も小西行長先より  
忠別谷と長輪はるはゆふれは終は備きゆふよひ都へ攻先陣と  
人々をせむしはぶきつ忠別谷の城へ入り是より先軍を承取  
令海と臨し密陽谷と降し是も忠別谷と来り令は外

令海と臨し密陽谷と降し是も忠別谷と来り令は外





都  
開  
源  
圖

真  
顯  
可  
竹  
篇  
卷  
四



諸將皆忠烈名集り多し附朝鮮國の平安道の黃海道日  
 上の三道の悉く委破られ殺てるに逃る者一人も無し百姓商賈の  
 老若山林の迹も絶え凡教多の國郡今も皆に三度押入りたるぞ  
 はしりしに彼に附忠烈名は小西外長が部下の兵士も民間  
 と推入く婦女を犯し財宝を奪え弘坊狼藉心の恨よするまひり  
 と加ふる計略先を以て小西外長と對面し所々の士卒民を  
 入く弘坊せざる其し於是より都の方へ委入んは何れも  
 兵の心もかくれど士卒乃心懸にいつれ狼藉とせしことなき  
 軍のいれ意り具我日本の恥辱なりと諸大将中合せ士卒の  
 弘坊と捕制とをさしことと申されたり外長も承りてありし

をと是より彼士卒等皆令恨衣服と大なる袴袴  
 木と放て焼とてせ制れと出し弘坊と捕せざる小で朝鮮の軍  
 民をば皆皆信ぶ徳に勝き南女妙法蓮華經の籠りんこと  
 百姓商賈心と安んじけ大の軍勝利ありしとあり形る異國の流  
 け仁徳と感ぜざるの事よ信ぶの徳義大と謂つて是信なきや  
 の教悔め給ふ依るよと云るしりた附小西外長加着信と  
 とい日本乃諸將忠烈名城外廣野に出く都と委入るに  
 降すに小西外長進み出くやされり都と委入るに  
 若必降し小西外長とばてらざる笑ひ朝鮮に入後  
 降る國の沖浪をなく某先陣をうけ給りぬ給るも國の  
 降る先陣はいつる我皮と云ふは信しき事なり





加賀の  
西が  
の狼籍  
と制  
の  
國

南無妙法蓮華經

真言宗六部卷四

四ノ目

十一





先陳之  
卒小國

真顯記六篇卷四

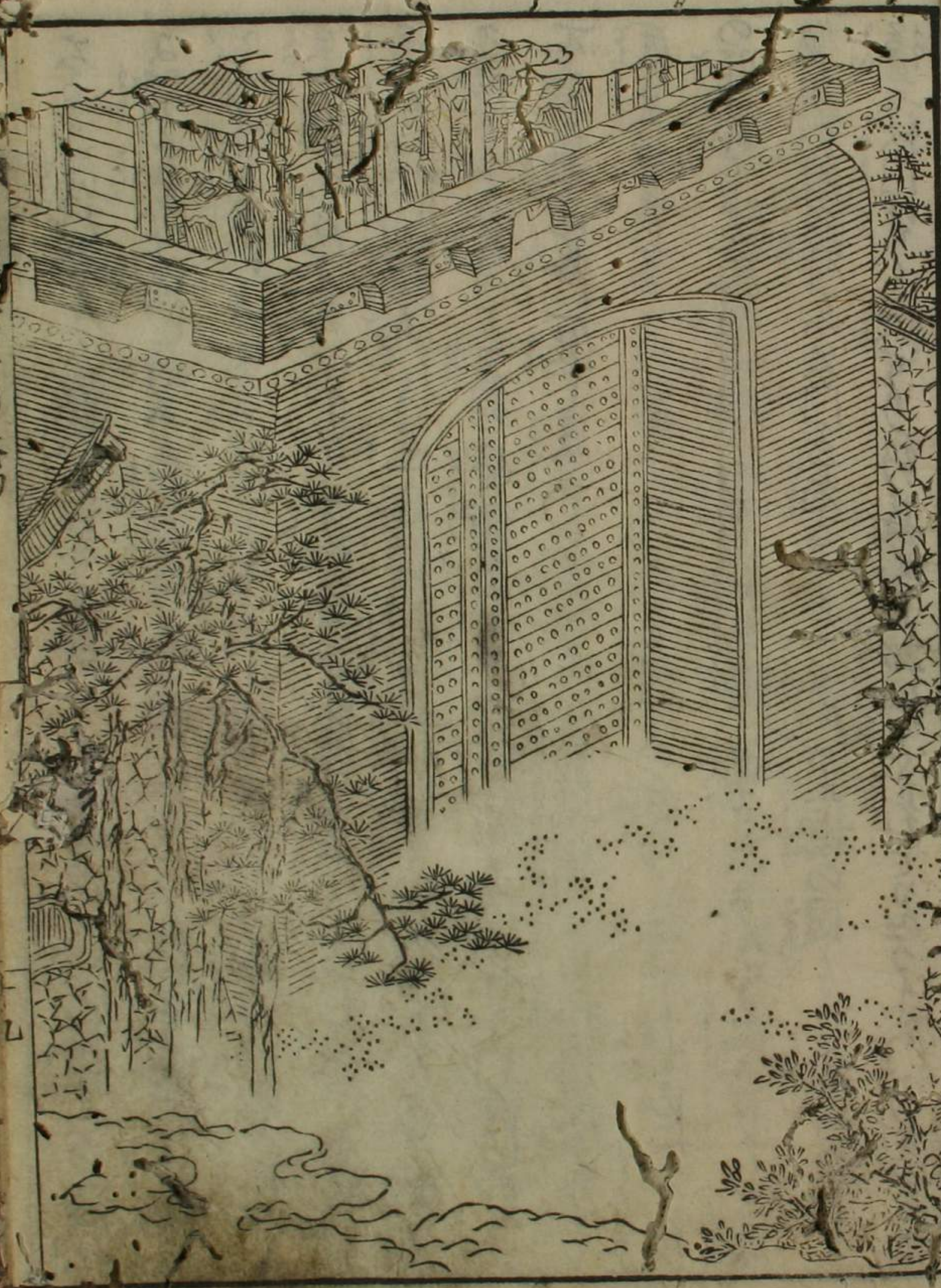
西



陣武勇の若必ど是と勅む軍心は是はしまげて我是と勅  
ん山を定て大は怒り吾武勇は於て何ぞ汝は皆へき尤由るは定にて  
我を武勇と試む討勝て後先陣は進ちしやと面を替つて怒りは  
也は是のいし其を勝るを力返えてまよるとは汝のよと双方旗中  
の勇士も主人の中知らば花う向く切捨んと柄と握りまよと  
赤引眼と見張て治す也何れはたまの山を以て多りと其多端志を  
後陣毛利左右に別してこれを制し一府の諸ありちともは種  
まよ定ち地をく和倫をぞ調ふる附志摩國毛利の面を中  
多の朝鮮の先陣は抄ひては汝は小西外長方はは就きともは  
長の要害の地三石の端し既は汝はまよとまよとつらまよとまよと  
の切の地は讓るともは不可なりは王城は入る道二筋ありは汝の  
加藤大外にお別と両道より進むは汝の地力も速はして互に  
勢も汝はまよと別ひせらまよとまよとまよとまよとまよと  
すは合衆せり小西外長方は入り王城は別ち小南大門と東大門  
との二道あり南大門は向ふは石の道は近しとまよとまよと  
あり東大門は石の道をしとまよとまよとまよとまよとまよと  
信正の白く我れたと大河ありまよとまよと南大門は向ふは石は  
て無様一変し加藤小西の両先陣二石のまよとまよとまよとまよと  
と汝はまよと汝はまよと進むまよと

小西外長入王城  
小西外長は身は長し東大門の石筋と揺りしんで急ぎがまよと  
軍兵を顔してまよとまよと





小西仍長玉城乃  
東大門之  
列  
園

手具是也









本戸の  
水園を  
破る  
國









龍津  
の  
河  
邊  
の  
圖

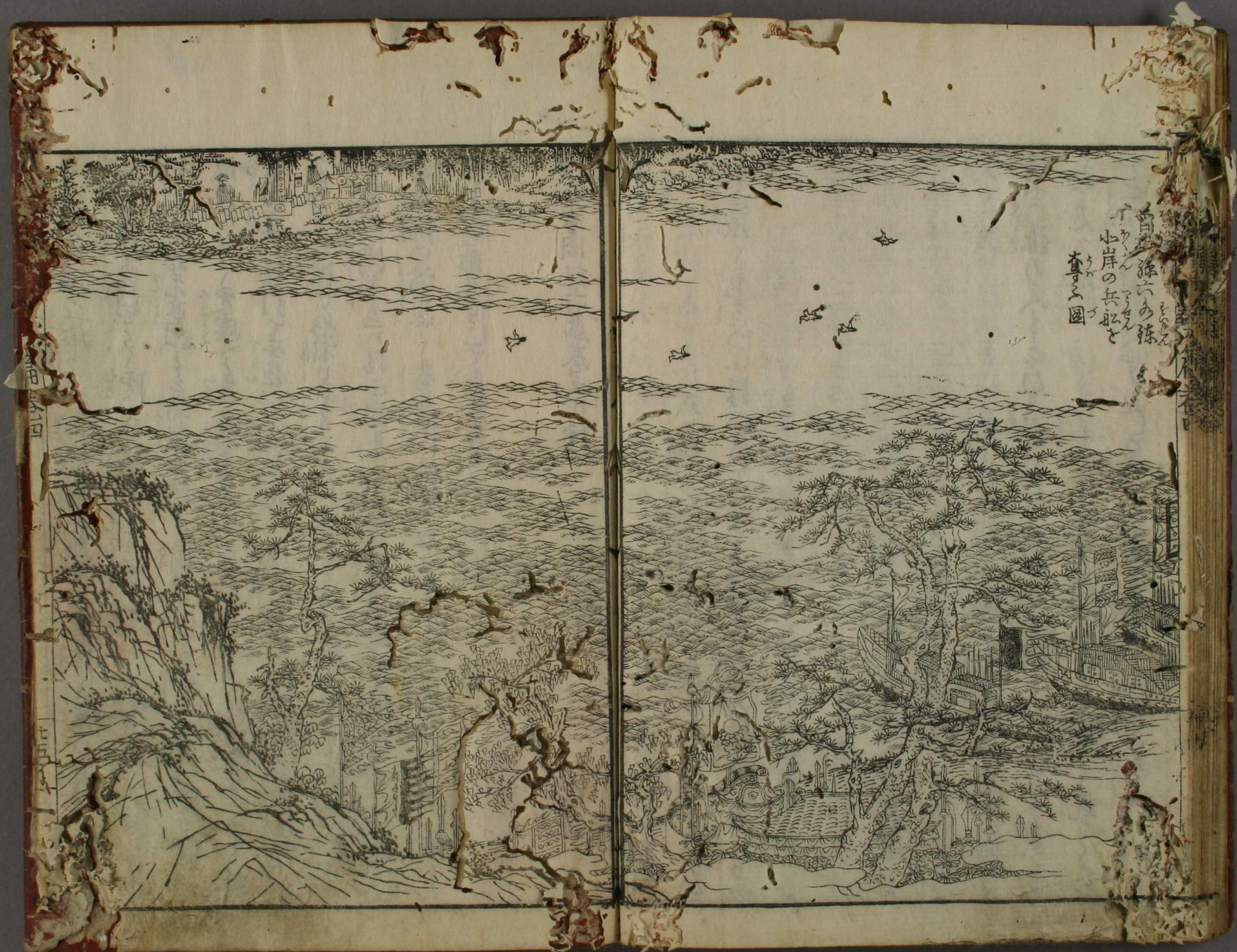


東海道  
の  
名  
所  
四









白根の兵船と  
奪ふ國

田

七







